

ペシャワール会報

No.62



ペシャワール会 〒810 0041 福岡市中央区
 大名一丁目10-25 上村第一ビル307号
 電話 ○九二(七三二) 二三三七二
 FAX ○九二(七三二) 二三三七三
 (FAX) ○九二(七二五) 三四四〇

異文化の壁越える強固な基盤を

中村 哲

実力とモラルを最優先に医師を訓練中です

小林 晃

ペシャワールのアンダーグラウンドバザール

藤井卓郎

現地活動の着実な歩みに感動

村上聡一郎

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

ペシャワール会インターネット

ホームページ <http://www1.mesh.ne.jp/peshawar/>

電子メール peshawar@mx.mesh.ne.jp

●虚構が真実を制する時代に 異文化の壁越える強固な基盤を

PMS（ペシャワール会ジャパン・医療サービス）院長

中村 哲

嵐のような数ヶ月

いかがお過ごしでしょうか。

ペシャワールは冬に入り、夜はストーブなしに過せなくなりまして。それでも、日中は強烈な日差しのお陰で、小春日和の毎日というところでしょうか。日本で騒がれたらしい「軍事クーデター」で、却って治安が良くなり、このところ余り血なまぐさい噂も聞きません。

病院の方は、小春日和と裏腹に、相変わらず台風の渦中にあります。確かに新建築がなり、設備も着々と整っています。しかし、問題は中味であって、現在新たな診療態勢確立に追いまわられているのが現状です。日本では考えられぬ出来事を一つ一つ解決してゆくのは、かなりの忍耐を必要とします。相違と相似がこんがらがって、なかなか理解してもらえないのです。お互いに遠い国だと思ふこと頻ります。

新病院に移転してから早や一年、よくもまあ事の多い年だったと思われれます。派手な動きこそありませんでしたが、「新しい診療態勢」を作るため

に要したエネルギーは、相当なものでした。先の会報でお知らせいたしましたのが、変わり目には何事かあることを覚悟していたものの、こうまでとは思いませんでした。

春と夏は大混乱で過ぎ、八月の不祥事で藤井さんが孤軍奮闘のところ、ついに堪忍袋の緒が切れた小生が「戒厳令」を発し、收拾に乗り出したのが九月。魯鈍な人間の堪忍が限界に達すれば、想像できる方もおられます。まずは頭を冷やして感情を抑え、煮えたぎる思いを胃袋に転嫁（胃腸薬の効能を改めて認識しました）、藤井さんとも計画的に病弊を一層する手を次々と打ち出し、引き締めに次ぐ引き締め。十月に藤田さんと小林先生が戻って更に改革を進め、同時進行で、コーヒスタン診療所の開設、「新教育計画」の発足と続き、嵐のように数ヶ月が過ぎ去りました。

懸案も着実に進行

小林先生が新任医師の教育に全力を挙げ、ペシャワールの若い医師たちの間で一目も二目も置かれる存在となりました。藤井さんと藤田さんが目立たないところで、実に根気よく細やかな問題を



コーヒスタン診療所の開所式で挨拶をする中村医師

解決してゆき、財政管理はもちろん、台所のことから買い出し、掃除に至るまで目を光らせました。そこに事務長として退役軍人のイクラムツラー元少佐を迎え、やつと全体管理の見通しがついてきたという訳です。お陰で、大きな内外の妨害はねかえし、まだまだとは言え、一応診療秩序は回復、病院の診療数は月間四千名に戻りました。最大の懸案であったアフガン・プロジェクト（旧JAMS）とパキスタン・プロジェクトとの統合も、少しずつではありますが進んでいます。よくこれまで乗り切れたものだ、現在、つかの間の虚脱



PMS病院の朝礼時の中村医師

感に陥っております。

我々をつなぐもの……

何故こうまでしてと思わないこともないのです。長年パキスタンになじんできた藤井さんがいみじくも述べたように、「この際限ない障害物は、悪いことに必然的である。私たちが今目指しているのは、何れも現地にならないものなのだ。こんな時こそ、現地の文化を大切にす気持を持ちたい」というのは当を得ているでしょう。

各ワーカーの苦闘はそれぞれの報告に委ねて割

愛しますが、「日本にも現地にも無いものを現実化する摩擦熱だ」と要約できるかと思えます。私たちが決して完全な日本方式を導入している訳でもないからです。「ではそれは何だ」と問われると、返事に窮します。強いて言えば、禅問答のようですが、日本にも現地にもなくて、日本にも現地にもあるもの。つまり、異なる文化集団の衝突から、むきだしの人間を発見し、共通の基盤に立つ新しい融合と共存を目指すひとつの挑戦なのかもしれません。もはや、菌の浮くような美しい人道主義には飽きました。きれいに整理された「国際援助」の議論、またそれに反対する議論、何だか最近、全てがますます眉唾に思えて仕方ありません。私たちの活動を貫く強固な糸は、きつと別のところにあるのでしょうか。

「山猫軒」

むかし子供にせがまれて何度も読まされた話の一つに、「注文の多い料理店」(宮沢賢治)がありました。現地・日本ともに、ふと昨今の出来事を見ると、全くその通りだと思ひ当たります。

西洋かぶれした東京の二人の紳士が、山道に迷い込み、「山猫軒」という立派な料理店を発見する。「こうすれば食事にありつける」と注文に乗っているうちに、我が身が食われる立場にあることに気づいて絶望する。だがそれは、自分で築き上げた実体のない迷路であつて、猟犬の吠え声で幻であることを知る——というものでした。

私たちは、この不確実の時代にあつて、時には虚構が真実を制する世の倒錯Ⅱ「山猫軒」に唸り

声を発する猟犬の如く、しかし時には汚されぬ一輪の野の花の如く、静かに一隅の「人間の希望」であり続けようと思ひます。次期三〇年の礎は成りつつあります。変わらぬ御支援と、希望を共にして下さるよう、切にお願い申し上げます。



一九四六年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワールに赴任。現地ミッション

病院で、ハンセン病コントロール計画を柱にしたアフガン難民診療に携る。一九八六年、JAMS(日本アフガン医療サービス、八年に全体のプロジェクトに編入)を設立、長期的展望に立ったアフガン無医地区での診療モデルを創設。現在JAMSは一つの病院と三つの診療所を設立し、アフガン人の無料診療に当たる。一九九四年、ハンセン病根絶のための病院PLS(ペシャワール・レブロシー・サービス)を設立、北西辺境州における本格的なハンセン病コントロール計画に着手し、病院に来ることのできない山岳地帯の患者への巡回診療と基地診療所の建設を行なう。一九九八年十月には恒久的統合病院PMS(ペシャワール会ジャパン・医療サービス、七十床)を建設。パキスタン側では他に現在三つの診療所を運営する。現在現地スタッフ約一五〇名、日本人スタッフ五名。年間診療数約十五万人

*ワーカー通信

実力とモラルを最優先に
医師を訓練中です

PMS 医師 小林 晃

腐敗の根を断つ

ベシヤールに到着した翌日にクーデターが起り、軍事政権が発足しました。波瀾を感じさせる今回のスタートとなりましたが、その後市民の生活にはほとんど変化が見られず、逆に私たちの病院には様々なことが起りました。

今回特筆すべきことは、多数の問題のある人の容赦ない解雇です。今までも問題のある人を解雇することは時々ありました。しかし、これほど多数の人を一度に解雇したことは、ベシヤール会の十五年の歴史が始まって以来のことです。

これまで不祥事を起こしたことに関連したすべての人、何度も警告を発したにも関わらず、上司の指示に従おうとしなかった人、金銭をごまかそうとした人、それに業務時間内に私用の仕事をした人の解雇などがありました。

今までは、特にベシヤールでの狭いアフガン社会では、互いをかばおうとする傾向が強いため、

周りのスタッフからの強い嘆願により大目に見ていたこともありましたが。しかし今回は全く妥協することなく問題のある人間を次々に解雇していききました。中村医師は、「恨みを買って下手をすれば命を狙われるかもしれないが、病院の将来を考えれば」と、相当の覚悟で次々に解雇していききました。時には解雇された人の怒号が病院に響きわたることもありましたが。しばらくはこういうこともあり、病院の中はいつも緊張感が走っていました。しかし、今回の解雇の嵐もほとんど終りに近づいてきたようです。

コネの悪弊を廃す

解雇され去っていく人もいれば、新しく雇用された人も入ってきました。将来の病院を担うべきトレーニー（訓練生）が、百二十名の応募の中から試験と面接で二十名、検査技師が十二名の応募の中から二名、医師が二回の試験により約六十名の応募の中から六名選ばれました。これまでは縁故関係を頼って雇用することが多かったのですが、今回より新聞の求人欄やポスターを使って公募し、試験と面接により、優秀かつ性格のよい人間を選びました。

また、成績のよい人も面接の時に態度が悪ければ不合格にしました。日本の就職の際にはこの様なやり方は当たり前のことですが、パキスタンでは稀なことです。ほとんどは縁故関係を使つての推薦によって就職したり、ひどい場合は役人に賄

賂を使って就職する場合もあるそうです。そのため本場に優秀な人が、コネがない、宗教が違うなどの理由で就職できない場合もあります。

二人がネを上げ退職

さて、私の主な仕事は医師の教育です。そのことを詳しく述べます。

まず、今回医師の試験は二度行ないました。一度目は約三十名の中から三名の医師を選びました。しかし、そのうち二人は給料が安い、フィールドワークのため地方に行かなければならない、また勤務時間が長く病院の規則が厳しすぎるなどの理由により一週間も経たないうちに辞めてしまいました。

幸い、一番で合格したアフガニスタン人でパキスタンのラホールの医学校を卒業したサイフラー医師は残りました。ちなみにアフガニスタン人でパキスタンの医学校に入れるのは年に全国で四人だけと決まっており、エリート中のエリートでないと入れません。パキスタンの政府の病院では、研修医の初任給は平均六〇〇〇ルピー（一ルピー約二円）で、勤務時間は午前中のみです。午後からは開業医のところでバイトをしたりして、平均四〇〇〇ルピーぐらい稼ぎ、合計平均一萬ルピーぐらいの収入があります。

こちらに応募してくる医師は日本のNGOの団体ということで高給を期待してきた人もいましたが、PMS病院の給料は政府の病院とほとんど変わりません。しかも勤務時間は、政府の病院が午前中だけに対して、PMS病院では日本と同じよ

うに朝八時から夕方四時半までと長く、アルバイトも厳しく禁止しています。アルバイトを禁止するのは、本業が疎かになり、金儲けのために必要な薬を処方したり検査をし、医者としてのモラルが崩れていくのを避けるためです。また、アルバイトにより勉強する時間も無くなります。

二人の医師が辞めましたので、再度試験を行いました。約三十名の応募の中から筆記試験で十名に絞り、さらに面接と口頭試験で最終的に二名を選びました。今回は途中で辞められることのないよう、試験の前に給料、拘束時間やフィールドワークの仕事などについて応募者全員に詳しく説明しました。今回選んだ二人は筆記試験はよくできましたが、心電図やレントゲン写真を見せて臨床能力を問う口頭試験は満足できる成績ではありませんでした。しかし、基礎知識があるとのこと採用しました。

ようやく勉強会の成果が

さて、昨年以來、今後を見据えた上での医師の若返りを図ってきましたが、三度の試験により、合計六名の新しい医師が入ってきました。この一年を振り返ってみますと、まだまだ満足はできませんが、かなり医師のレベルが上がったように思えます。当初は回診時に、「脳梗塞の治療には血管拡張作用のあるニトログリセリンが有効で……」など、大昔の治療を自信ありげに述べる古い知識のままの医師が手を振るついで、心電図やレントゲンでもピントの外れた議論が始まり、そのため研修医が先輩医師を蔭で馬鹿にするというこ

ともありました。そこで今回、心電図、心音、そしてレントゲンの勉強会を始め、また内科、熱帯医学、らいと心電図の教科書を決め、全員に配布しました。その結果、不必要な議論が少なく、高度の議論もできるようになってきました。

また、腹部エコーを始めて約一年が経ちました。それが、それによりいろいろな疾患が見つかり、さまざまな疾患の患者が入院するようになりました。給料が安い、拘束時間が長い、フィールドワークに行かなければならないという厳しい条件にも関わらず、毎回研修医の応募には多数の人が駆けつけるようになりました。「PMS病院に行けばいいの教えてくれる日本人医師がいる」という噂が地元の大学病院であるカイバル医学校の研修医の間で囁かれているというのも耳にしました。基本的にこの厳しい条件を承諾し、しかも高い競争倍率を勝ち抜いてきた、若く優秀かつモラルのある医師たちばかりですので将来が楽しみです。

「この病院なら安心」

新人研修医の中に、昨年初めての試験で一番で入ったガジ・スルタンという医師がいます。彼は今回イギリスに渡り、MRCPというイギリスの専門医になるための一次試験に一度で合格しました。この試験は旧イギリス支配国、及びアラブの国々の医師であれば誰でも知っており、なおかつ憧れる非常に難しい試験です。彼は、ここペシャワールの有名な外科医を父に持つ大金持ちの息子です。ガジ先生はこよなく文学や詩を愛しており、残念ながら私にはそのような感性はありませんが、

時折私にウルドゥー語の有名な詩について語ってくれます。また日本のことも非常に詳しく、「ドクター、日本では女性とデートするときはギンザ(銀座)でするのでしょ」などと聞いてきます。彼の父親は、我々の病院の基本方針である「らい患者、身体障害者、及び貧困のため適切な治療を受けられない患者を診ること。誰も行こうとしないところで医療を行なうこと」などに共感し、この病院なら自分の息子を安心して預けられると言ってくれました。また、本人もPMS病院の現在の教育スタイルは勉強になるので、今後ともここで勉強を続けたいとも言ってくれました。彼のような優



ラシュト診療所にて診療中の小林医師



PMS病院に入院中の患者さんたち

秀な医師がいてくれるのは病院にとっても頼もしい限りです。

階級社会

今回ペシャワールに来てすぐに、中村医師から「小林君は医者だからもつと偉そうにしてなさい。相手が挨拶をしなければこちらから挨拶をする必要はありません」と言われました。最初はこの意味が分かりませんでした。しかしこちらは階級社会です。日本では子供のころから「人間はみな平等」と教育を受けてきました。病院には掃除人、洗濯人、料理人、門衛など様々な人がいます。私

が荷物を持って歩いてみると彼等は手伝おうとします。当初は私より年が一回りも違う人にそんなことをしてもらっては悪いのではないかと思ひ遠慮していました。しかしこちらでは、階級の違う彼等が、医師である私の荷物を持つのは当たり前なことです。また日本人のようにここにご笑いながらすべての人にお辞儀しながら歩くのはこちらでは異様に映ります。もちろん不必要に威張る必要はありませんが、郷にいれば郷に従わなければなりません。さもないと、統率が取れなくなりま

す。こちらに来て三年になりますが、階級社会というものが少し分かってきたように思えます。さて、もうしばらくすると中村医師が一時帰国します。その際、院長代行の仕事をするように言われました。私は当惑して「今まで、小学校のときに学級委員長になったことは一度ありますが、このような大役は私には……。私としては医師の教育に専念できればありがたいと思ひますが」と言いました。しかし、「まあ、将来何かの役に立つでしょう」と、いつもの調子で言われました。幸い、藤田さんと藤井さんがいますので何とかなると思ひます。何事も無いことを期待します。

▼未使用の切手、ハガキを！▼
*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(古切手は扱っておりません)

表紙をめぐる小さな物語 24

ハキムの買物

甲斐大策

街中のスピーカーから日没前のアザーンが湧き出る。菓子箱を抱いたハキムは、ペシャワール旧市街金市場近くの祠のへりに、老いたトンドビのようにじやがみ、夜のためのアテルの銘柄を店の者にどうたずねたものか必死で考えていた。

二十二歳のハキムが、ペシャワール北西の難民キャンプで、同じ地区育ちの十七歳の娘を娶ったのは七日前だった。昨夜も新妻は、泥が匂う部屋の隅に蹲り、褥には近づかなかった。式以来ハキムは、妻に触れるどころか、まともに顔も見れず、語り合うこともなかった。何か欲しいものは、たとえれた時だけ、妻は、ピングのクリーム・ケーキ、と答えてくれた。新居に据えた韓国製テレビで、クリスマスにまつわるシーンを見たからに違いない。イサア(イエス)を、偉大な預言者のひとりと信じるハキムは、その人の生誕を祝い、妻が和むのならケーキもい、と思った。朝陽を浴びてスレイマンの嶺々の雪を眺めるハキムに声をかけたのは、ハキムを一人前のドライバーに育てたヌール・ババだった。「ハイノム(奥さん)は、ここから出たことのないビビだ、じっくり待ってやれ。今はまだ、何もかも怖いんだよ。アテル(香油)が一番だ。心を柔かくする。暖かい部屋を甘い香りとお歌で一杯にする。ヒンドウのテープ届けようか……。」

ヌール・ババいう甘い香り、それしかない、とハキムは思ひ到った。シリントリン(最も甘い)アテルを、と云おうと決め立ち上った。

ペシャワールの アンダーグラウンドバザール

PMS現地連絡員(会計担当)

藤井卓郎

地下にバザールが！

私は仕事の関係で時々街に出る。病院の車で事務仕事を済ませて帰ってくるだけである。場所も旧市街ではキッサハーニーバザールあたりまで、サダルかユニバーシティータウン近辺における仕事が始どであり、あつちこちうろついているわけではない。しかし「夕べの買い食い」を除けば、殆ど唯一の外界との接触になっている。

最近のことであるが、ある日ペシャワール市内とハイバル峠を結ぶジャムロードを走っていると、ユニバーシティータウンからサダル方向に少し行ったところ、アルバーブロードとの交差点付近で道路を一部閉鎖して何やら工事をしていた。ドライバーのハーン・ジャーニに「こりゃ何の工事かねえ」と聞いたところ、「地下に道路とバザールを作ってるんだよ」とのこと。彼の話ではペシャワール・ユニバーシティー前とバーラーヒツサール砦前でも同様の工事をしているという。ペシャワールにも地下街が誕生。もちろん完成はいつのことやら分からないし、規模も大したこと

はなからうが、経済も破綻状態、文民政権も崩壊したが、街は少しずつ華やかになっていく。これを底力というべきか。

会計の技術指導も必要

先日十一月二十七日にPLS開設五周年記念、PMS新病院開設一周年記念を兼ねてささやかなパーティーが催された。病院の建物が立派になった上に、最近大変有難い事に諸方面よりのご援助で新しい医療機器等を購入する計画が進行している。検査治療の高度化と共に、増加している患者さんに対し不足しがちな人手を補うものとして、新規導入の機械を活用させて頂きたい。

PMSの教育プログラムとして、若く前途有望な人材を育てるためにも機器教材等を援助していただく計画もある。ご援助下さっている皆様、関係諸機関に篤くお礼を申し上げます。

私の仕事にも最近、機器納入業者との取引などが加わり忙しくなってきた。現金を持ち運ぶ危険を避けるため、支払を極力小切手で行なうよう努力している。現在私にとっての懸案は会計処理の量的増大、複雑化への対処であるが、残念ながらまだまだ私の事務処理能力は不十分で日々の仕事に追われている状態である。

一年半前に着任した折には、実際に事務処理を行なうのはパーキスターン人、アフガン人の事務スタッフであり、私は日本の事務局の意向を反映させるために側面から指示助言するという構想であったと思う。

しかしその後のハンフリー氏の英国教会ペシャ

ワール教区教育監督就任に伴うPMS事務長辞任で状況は一変した。当初は事務関係全体、後に会計専門という形で私が事務処理に直接携えることになった。事務の専門家ではない私に往々にして様々な注文がつくことも増えてきた。

今、医療技術のみならず会計を中心とした事務処理についても日本からの技術指導が必要だと感じている。もちろん私も精一杯努力するが、日本の事務局・会員の皆様のご援助もお願いしたいところである。

「野戦病院」からの脱皮

それにしても病院が少しずつ充実していく姿を見るのは楽しいものである。人事面でも新事務長の雇用、新人医師と臨床検査技師の雇用等を柱により仕事ができるスタッフが揃ってきている。小林先生による医師達への指導も成果を上げ、診療技術も向上していると聞く。

私の目前で進行しているのは、中村先生のお言葉借りれば「野戦病院から本格的な病院への脱皮」であろう。会計の仕事も「家計簿に毛が生えた程度のもの」から本格的なものに脱皮させねばならない。

日本の会員の皆様のご善意による六千万円からの巨費を投じた病院を目の前にし、充実してきたる諸設備を数え、さらには百四十名からの現地人スタッフの生活を思うとき、事業の安定的かつ長期の継続を祈らずにはいられない。私も自分の担当分野における責任の重大さをひしひしと感じている。

*ペシャワール訪問記

●フィールドワークに同行して
現地活動の

着実な歩みに感動

佐賀大学医学部四年 村上聡一郎

コーヒスタンへ

皆さん始めてまして。まずは自己紹介から。私は現在佐賀医科大学に通う、四年生の学生です。

あるきっかけがもとで今年十一月二十五日、ペシャワールのPMS（ペシャワール会医療サービス）を訪ねました。ほんの数日前に突如病院の方へアポを取っただけの私を、事務の藤井さんに親切に案内して頂き、JAMS（日本・アフガン医療サービス）の病院までも見させていただくことができました。想像以上に立派な病院の佇まいに少々驚かされ、中村先生他スタッフの皆さん、そしてペシャワール会の十五年間の努力の結晶に感嘆していました（しかしそれはほんの序章に過ぎませんでした）。

一日案内して頂いた私はホテルに戻り、一日の訪問に満足しつつ、ゆっくりしていた折、藤井さんから案内があり、「コーヒスタンの診療所に中村先生が行かれるのだけれど、よかったら一緒に

ませんか？」と誘われました。この日いろいろと忙しくてお会いできなかった中村先生と話もできると思い、この予期せぬ誘いを私は喜んで受けました。

こうして十一月二十八日の朝七時、中村先生、サイフラー医師他とコーヒスタンの診療所へ向うことになりました。「コーヒスタンまでは十時間近くかかるよ」と言われていた私は、「そんな遠いところにある診療所をコントロールしていくのは大変ですね」と中村先生に尋ねると、先生は「六つある辺境の診療所の中では最も楽勝だよ」という答えが返ってきました。私は、「……」。

道なき道を

それはさておき、この日の朝出発の時に、何と一人のスタッフが逃亡して姿を眩ませてしまいました。それを聞いた私は、皆さんには失礼ながら「おもしろい国だな」と思っていました。日本ではなかなか聞かないトラブルですが、中村先生に言わせると、「この国はいろんなトラブルが次々に起る。トラブルが無いときはまずないよ。多いか少ないかだね」ということでした。またもや私は、「……」。しかしそのような国で医療を根付かせようとしている中村先生の苦勞をほんの少しだけ垣間見たような気がしました。

何はともあれ、なんとか代わりのスタッフを急遽補充した私たちは、午前九時再出発しました。



ジープで巡回診療に向うPMSスタッフ

パキスタンの道路は基本的に舗装がしっかりしておらず、また車線もほとんど皆無で、にもかかわらず皆相当地に飛ばすので、私はガタガタ揺られながら、「無事着くのだろうか?」と少々不安を抱きつつおとなしく車に乗っていました。

越峠し、町々を抜け、インダスの支流を上り、八時間かけてようやく診療所のある谷の入口に着いた私たちは、そこから更に一時間強、岩だらけの道路を（私に言わせればそれは、道路と言うより登山道に近かった……）更に上流へと上っていきました。この頃には日が暮れていて、ほとん



巡回診療のテントで薬の準備をするアーベツ看護士

ど周りの見えない車の中で、私はまるでパーテンに振られるカクテルシェイカーのようになりながらたまりかね、「これが楽勝なんですかつつ!？」と中村先生に尋ねると、またもや「ええ楽勝ですよ。私たちはこれが日常化していて、どうも何とも思わないようになりましたねえ」と笑いながら答えられ、私は「……」となるより他ありませんでした。

こうして私には大変だった九時間の行程は無事終了し、その道程を反芻しつつ、就寝したのでした。

ささやかな診療所の「重さ」

翌朝目を覚ました私は、外に出て目を見張ることになります。険しい山々、深い谷、その間を流れ続ける澄んだ川、静かに流れる時間、そうしてその中に溶け込む人々、そんなところにこのコーヒスタンの診療所がありました。この診療所が今一番軌道に乗っていて、ここまでくるのに四、五年かかったということでしたが、一つの診療所を軌道に乗せるために必要な時間、労力、さまざまな人々との摩擦（実際この日も地元の保健夫らしき人と小さなめごとがありました）等を思い巡らせ、この谷にある一つのささやかな診療所の重さを深く感じさせられました。

スタッフ逃亡のトラブルもあり、この日のうちに私と中村先生は帰ることになったのですが、谷を下る途中、往きには真っ暗で見えなかった景色を眺めてみると、何ともこの谷には不似合いな立派な建物が目につき、さっそく中村先生に尋ねてみると、「これは日本の援助で政府が莫大な金をかけて建てた学校なんです、生徒は来ないし、教師はいるにはいるが谷の下で暮してここまで上って来ないため、今は空っぽなんですよ」ということでした。

私はその莫大な金のかかった空っぽの荒涼とした建物を横目で眺めつつ、小さいけれど確かに根付いて来ている小さな診療所とあまりに対照的なこの建物を建てっぱなしの政府と、海外援助の意味を考えさせられ、なんとも寂しい気持になったのです。そうして改めてペシャワール会の重要性

を痛感させられたのでした。

今度はチトラールへ!

こうして思いがけずPMSの真の活動の一端を垣間見ることができた私は、帰って来て、とても有意義だったこの旅に、そしてその機会を与えて下さったPMSスタッフの皆さんに感謝していました。ところがまだまだ事は終わっていないのです。

コーヒスタンから帰って来た二日後の十二月一日、「あるトラブルの解決のため（ここではとにかくトラブルが多いようだ……）、チトラールへスタッフを送ることになったのですが、せっかくだから君も一緒に行ってきたらどうですか?」と中村先生に勧められ、言葉もろくに通じないスタッフとの旅に少々不安気味だった私も、藤田さんらの「とにかくきれいな所だから行ってきなさい。一生に一度行けるかどうか分からないよ」という言葉に、このチャンス逃す手はない、と意を決し、「ぜひ行かせて下さい」ということになったのです。

このチトラールへの旅で、私は先生の「楽勝」という言葉を「なるほど!」と噛み締めることになります。

「コーヒスタンは楽勝だ!」

十二月一日の朝四時、私は英語の話せるジャー医師、ヤールマスディン看護師ら総勢五名でチトラールへ向いました（ちなみに私はあまり英語が話せません……）。計九時間、チトラールの更に奥にある最終目的地であるマスツジまで含めると実

に計十二時間かかるというその行程には既に余り驚かなくなっていました。チトラールまでの九時間のうち三時間近くかけて、私たちはチトラールへ入るロワリイ峠を越えたのでした。峠といっても最高標高は三〇〇〇メートル以上あり、また一面雪に覆われた部分が半分のこの峠は、当然舗装されているはずもなく、ジューズメーカーにかけられたごとく車の中で跳ね回っていた私は、チトラールに着く頃にはすっかりジュシーに仕上がっていたのでした。そうして「なるほどコーヒスタンの方が“楽勝”だ……」と感慨に耽るのでした。しかしこの時もスタッフの皆さんは平気な顔をして陽気に私を気遣ってくれるのでした（皆さんありがとうございます）

言葉で言い尽くせない景色

この日私たちはチトラールで一夜を明かしたのですが、その時の夜空と人家の灯りのなんと美しいこと!! 時折天を駆ける流れ星をぼんやり眺めていると、山肌まで伸びていく柔らかな人家の灯りとの境界が溶け込んで、大きな空がどこまでも続いているような、そんな錯覚に落ちていく……寒さは肌を刺すようだけれど、部屋の前で旅人が焚いている焚火の炎がその寒さを溶かしてゆく……初めて味わうその景色に見とれながら、私たちは床に就いたのでした。

翌日まだ明け切らぬチトラールの朝もやの中、オフィサーに会いにゆき、九時、マスツジに向けて出発しました。その道中、標高七七〇八メートルのテイリチミール山、それと肩を並べるようにし

て広がる、険しい山、山、山……それらの間を縫うようにして流れる川、時折通りすぎる小さな集落、とても言葉では表現し尽くせない景色が私の横を通りすぎていくうちにマスツジに着きました。私が驚いたのは、アプローチにここまでかかったマスツジに、PMSのコントロールする診療所があるということでした。しかし中村先生に言わせると、このマスツジを拠点にして、さらに谷の奥へ診療しに行っているということでもまだ楽勝ということでした（先生の口から更に“楽勝”という言葉が出てきたのでした!!）。

山道が封鎖

無事交渉を終えた私たちは、チトラールへまた戻り、そこで一泊して翌日三日、帰路についてのですが、ロワリイ峠の頂上を少し越えたところで私たちはまたもトラブルに出会ったのです。一部の山道を雪が覆ってしまい、そこで一台のトラックが立ち往生していたのです。細い一本道の山道は、次々に来るトラックやジープによってたちまち大渋滞に陥りました。皆で協力して、私たちが再度動き出したときには四時間が経過してしまいました。

何とか無事にペシャワールに辿り着いた私は夢のようなこの数日を反芻しつつ、深い眠りに落ちたのでした。

この数日の間に私が見た全ての物は、いろいろな意味で私に強い衝撃を与えました。少しずつ、ほんのわずかずつ進んでいる活動。日常の仕事に追われていると恐らく見失うときも少なくないで



あろうその活動には、しかしながら確実に前に進んでいるように思えました。それは十五年という年月をかけここまで広がった活動の範囲と、それらの活動の中心として機能し始めているペシャワールのPMS。それらを目にしたとき確信できるのです。

小さな力が集まって……

こうして文章にすると簡単なようですが、実際にそれらの困難な活動を、先頭になって引っ張っている中村先生。日本では思いも及ばないような

種々の問題（宗教、雇用、人間関係、政治、習慣など）を抱えつつも、初志を見失わずに前進するというこの上ない困難を可能にしているのは、何より先生あつてのことであろうと思います。

時には医師、時には経営者、時には設計士（PMSの病院を設計なさった）、時には政治家（政治的問題も多く抱えていらつしやる）、時には登山家、時には作家、多くの顔を持ち、穏やかで時に非常に厳しいとてつもないパワーを秘めた冒険家（私にはそう見えましたが）で皆を引っ張る中村先生。

そうしてその先生の周りに集まった日本・現地スタッフの皆さん、そしてそれらの活動を支えている日本のペシャワール会。パキスタンで機能していないNGOや各国の援助を見聞きした私は、小さな一人一人の力の集まりが確実に機能しているペシャワール会の偉大さを痛感させられたのでした。

最後に、昼食を抜いてまで私を案内して下さいました藤井さん。ご家族と一緒に夕食をご馳走して下さい何かと気にかけて下さった小林先生。私の取るに足らぬ話を聞いて下さり中村先生をいつも支えていらつしやる藤田さん。ろくに英語も分からぬ私を何かと気遣って下さった陽気なジャーナリスト、チトラール帽を私にプレゼントしてくれたヤールマスデイン看護士他、私を温かく迎えて下さった現地スタッフの方々。私に、人生において非常に、とてつもなく大きな経験をさせて下さったことに心から感謝します。また私の稚拙な文章に最後まで付き合ってくれた皆さんに感謝します。

事務局よりのお知らせ

ペシャワール会2000年カレンダー
「アフガニスタンの風」

(画・甲斐大策)

予約募集中！

ペシャワール会では、2000年を前に、毎号の表紙画を描いていただいている画家の甲斐大策氏の絵による来年度のカレンダーを作っております。定価は1000円です（送料350円）。購入ご希望の方は、ペシャワール会の郵便口座に「2000年カレンダー希望」と明記の上、代金と送料を合わせてお送りいただければカレンダーが出来次第、こちらから郵送致します。数に限りがございますので、予約はお早めをお願いいたします。



表紙



1.2月

定価1000円（送料350円）

●事務局便り

*一九九九年が暮れようとしています。二〇世紀もあと一年を残すのみとなりましたが、外では冷戦体制崩壊後激しくなった民族どうしの憎悪と戦争に貧困、内に目を向ければ、リストラと自殺者の急増に加えあやしい宗教の横行と、あまり明るくない話はないようです。振り返って日本のことを考えれば、この百年の前半分は戦争を繰り返したあと半分はひたすら喰うことに明け暮れてきたようです。よく、「モノは豊かになったが、心が貧しくなった」という言葉を聞きます。しかし本当に心豊かな頃というのがあったのでしょうか。そして今はモノが本当に豊かなのでしょうか。もう一度考えてみた方がよさそうです。

*中村医師の報告にあるように、現地の困難はますます深度を深めているようです。これは私たちが、口先の異文化理解の域から、現地文化の表土の先にある、最も強固な岩盤に達しつつあるということではないでしょうか。中村医師の言う、「日本にも現地にも無いもの」をこそ、私たちの事業を通して創り出して行かねばならぬ地点に立ち至りつつあるということかと思えます。

*遅くなりましたが、中村医師の「医は国境を越えて」が出来上がりました。この十五年が凝縮した報告です。「虚が実を喰らう時代」への痛烈なメ

ッサージでもあります。『ペシャワールにて』と『ダラエ・ヌールへの道』も併せて増刷されます。ペ村から

二年ぶりに中国から帰国して数ヶ月。まだ慣れない。中国では人の繋がりがとても重視される。悪くいえば法規によって処理すべきところも人間関係で決まってしまう。良くいえば、知り合いであれば「何とかしよう」ということになる。逆にそのプレッシャーもあるのだが……。中国は食べ物がとても濃密な気がする。毎日食べていると、時に日本風のおつきり味が食べたくなる。中華は世界中にあるが、最近日本の料理も広まっている。日本食はおいしい。これは私が知る中国人もほとんど言っていた。帰国して食べる料理は御飯、みそ汁、どれもおいしいが、何かがいつも足りない。何か軽く、上べの美味しさで心の満足が無い。日本の中のエスニック村は上べだけでなく濃すぎもせず居心地がいい。濃い淡いではなくまた別の尺度なのだ、我々御用達の料理屋で想いに耽る。日本では店の雰囲気も一緒に食べなければ軽い。

③もまるごと食べなければ居心地が悪いかな？でも食べ過ぎもこわい。ほどほどがいいんだけど。(ま

●ペシャワール会ハンセン病院建設基金
郵便振替 〇一七三〇—九一三二四二一

【新刊】 医は国境を越えて

中村哲 四六判上製三〇〇頁 本体二〇〇〇円
アフガン・パキスタンでハンセン病の根絶と山岳地帯での診断に携って十五年。宗教・民族・政治の軋轢と陰謀の地で悪戦苦闘のメッセージ

ダラエ・ヌールへの道

中村哲 四六判上製三二六頁 本体二〇〇〇円

ペシャワールにて【増補版】

中村哲 四六判上製二六〇頁 本体一八〇〇円
石風社 福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七二四) 四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 本体一〇六八円
筑摩書房 東京都台東区蔵前二一六四
電話 〇三(五六八七) 二二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとられず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARA HOUSE
(千八一〇〇〇四) 福岡市中央区大名一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号 ☎ 七三二—三三七二 内におく。